

近代芸術の帰趨

～反人間主義・自律化・純粹化のゆくえ
(19世紀～1960年頃)

サウンドデザイン演習

女子美術大学 石井拓洋

ishii05042@venus.joshibi.jp

「われわれはわれわれ自身を理解しない。

われわれはわれわれを取り違えざるをえない」

フリードリヒ・ニーチェ (1844=1900) 『道徳の系譜』 8

本日の話の流れ

1. 啓蒙思想と近代芸術
2. 人間中心主義への懐疑
3. 近代芸術の帰趨

1. 啓蒙思想と近代芸術

啓蒙思想とは

- 17Cから18Cの西欧における旧弊打破の革新的な思想
- 合理的**理性**を尊重し、**進歩主義**を標榜をした
- 理性的思惟によって**宗教的権威**や**王侯貴族に抵抗**した
- 政治、教育を通して人間生活の**幸福の増進**を理念とした
- 基本的人権 (自然権 = 人が生まれながらに有する権利) の萌芽

「キリスト教・王侯貴族」のためから、**「市民」のための生活へ**

(※ 第6回講義「古典派音楽の時代」スライドより)

啓蒙思想と「芸術」(近代芸術)

「人間が世界の主人となるということは
人間がみずから神に代わる存在となることを意味する」〔松宮：80〕

「『芸術家』とは理念的にはみずから神となって、自己の作品を通じて、
歴史と社会がいまだ発見しえなかった新しい価値を創出する
『創造者』となることである」〔松宮：67〕

(※ 第6回講義「古典派音楽の時代」スライドより)

啓蒙思想と「芸術」(近代芸術)

啓蒙思想と市民革命を経た近代において、

ヨーロッパは、18世紀に至り、ついに、

個人における個性的な創作としての芸術が誕生する基盤が整う。

つまり、この時期にいたって、

現代の我々が考える一般的な意味での
「芸術」が生まれはじめる。

近代芸術の特徴

- 【西洋中心主義】

- 【要素還元主義】

芸術的側面では、芸術の「本質」をさぐるために、他の表現要素にたよらない〈自律的な芸術〉、純粹化、形式主義への志向する動きにあらわれる。

- 【進歩主義】

- 【人間中心主義】

=ヒューマニズム humanism

2. 人間中心主義への懐疑

人間は世界を正しく認識できるのか？

2
人間中心主義
への懐疑

- なぜ「世界を正しく認識」する必要があるのか？

人間は世界を正しく認識できるのか？

- なぜ「世界を正しく認識」する必要があるのか？

→ もし「世界を正しく認識」できたなら、
世界のあり方を人為的に操作できるから。

啓蒙思想によればそれが可能なはずであった。

人間は世界を正しく認識できるのか？

2
人間中心主義
への懐疑

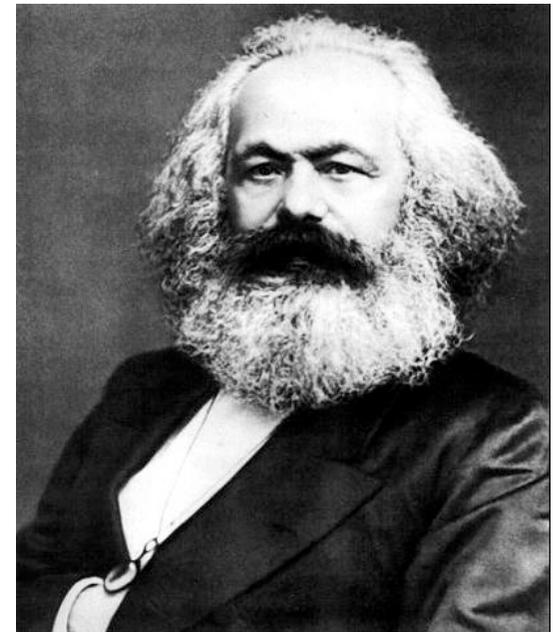
- ・ 世界を〈正しく認識〉することの含意
 - 人間の **認識能力への信頼感**
 - **唯一の〈正しい世界認識〉**の存在 (数学の答えが多様でないように)

しかし、思想家たちは、、、

人間は世界を正しく認識できるのか？

2
人間中心主義
への懐疑

- ・ カール・マルクス Karl Marx (1818-1883、独)



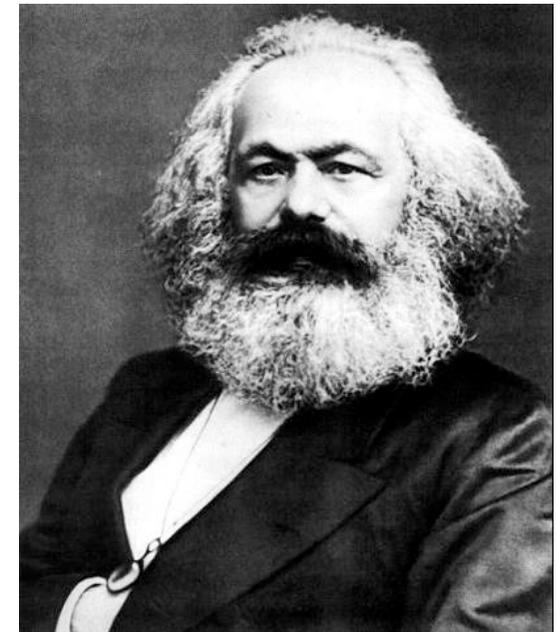
人間は世界を正しく認識できるのか？

2
人間中心主義
への懐疑

- ・ カール・マルクス Karl Marx (1818-1883、独)

「人間は『どの階級に属するか』によって、
『ものの見え方』が変わってくる」 [内田:27]

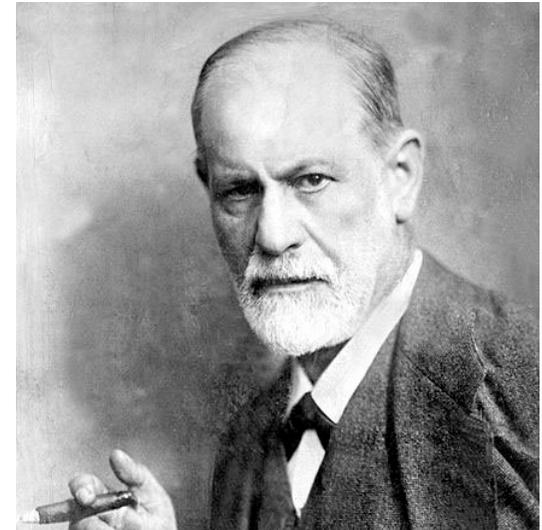
→ 人間の認識は确实ではなくて、
恣意的(場当たりの)である



人間は世界を正しく認識できるのか？

2
人間中心主義
への懐疑

- ・ ジグムント・フロイト Sigmund Freud (1856-1939, 独)



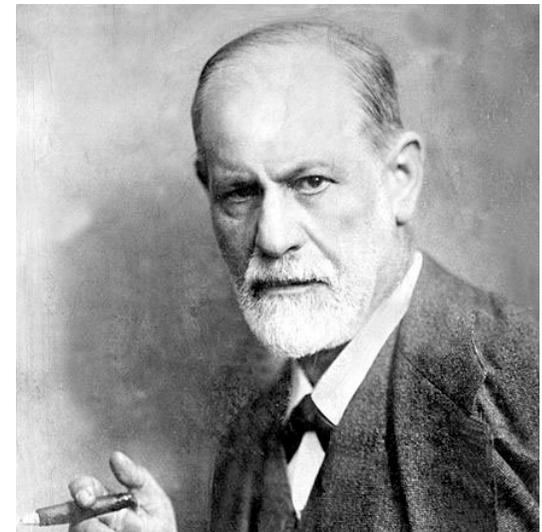
人間は世界を正しく認識できるのか？

2
人間中心主義
への懐疑

- ・ ジグムント・フロイト Sigmund Freud (1856-1939, 独)

人間が**直接知ることのできない無意識の領域**が、
人間の考えや行動を**支配**する

→ **人間は人間自身のことも
知ることができない**



人間は世界を正しく認識できるのか？

2
人間中心主義
への懐疑

- ・ マルティン・ハイデガー Martin Heidegger (1889-1976, 独)



人間は世界を正しく認識できるのか？

2
人間中心主義
への懐疑

- ・ マルティン・ハイデガー Martin Heidegger (1889-1976, 独)

人間は居心地が良い状態にいと、
大衆として世間に埋没し、彼本来のあり方を見いだせず「頹落」(墮落)する。
一方で、居心地が悪くて、死が身近なほど不安な状態にいと、
自らを自己自身へとふりむかせ、本来的な自己を「取り戻す」。

(※「もし来年死ぬとしたら、あと一年どう生きる？」的)

→ "ありのまま" にしていれば墮落する
= 人間が意のままに生きることへの不信



人間は世界を正しく認識できるのか？

2
人間中心主義
への懐疑

- フェルディナン・ド・ソシュール Ferdinand de Saussure (1857-1913, 仏)



人間は世界を正しく認識できるのか？

2
人間中心主義
への懐疑

- フェルディナン・ド・ソシュール Ferdinand de Saussure (1857-1913, 仏)

人間の観念は自由ではなくて、**言語規則の範囲で制限**されている。

ex.) 虹の色

日本 (赤、**橙**、黄、緑、青、**藍**、紫) 7色

ドイツ (赤、黄、緑、青、紫) 5色

→自国語の**単語の有無**で世界認識が**左右**されてしまう。

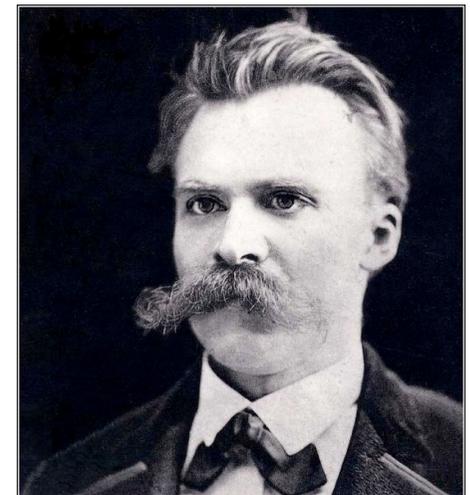
つまり、それほど、人間の認識とは**自由**ではなく、
また、物事を**正確に語る**ことができない。



人間は世界を正しく認識できるのか？

2
人間中心主義
への懐疑

- ・ フリードリヒ・ニーチェ Friedrich Nietzsche (1844-1900, 独)



人間は世界を正しく認識できるのか？

・ フリードリヒ・ニーチェ Friedrich Nietzsche (1844-1900, 独)

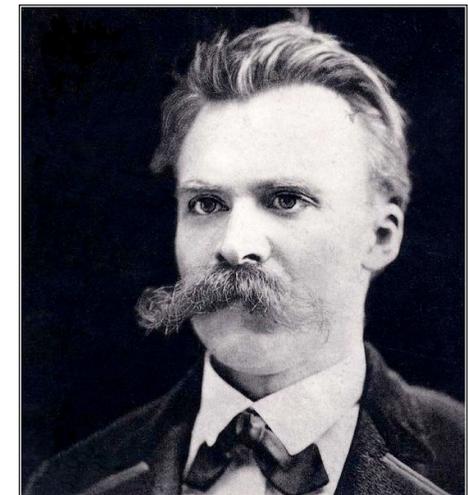
世の多くの人々は、現実の辛さから〈屈折した人〉になる。
彼は屈折した世界認識から、さらに屈折した理想社会を〈求める〉。
しかし、そのような世界像は彼の自己正当化と現実逃避に導かれた
架空の世界にすぎず、現実には存在しない。
しかも、屈折が導いているため、彼を幸せにはしない。
なので、いずれ彼は失意して、ニヒリズムに陥いざるをえない。

※ 上記はニーチェ『道徳の系譜』(1887)を石井の解釈によって
まとめたもの。なので、ニーチェ自身の文章・用語ではないことに注意。
このスライド内〈〉は石井による強調。「」はニーチェが使用した用語。
〈屈折した人〉= 近代的市民のこと。〈求める〉= 啓蒙思想に導かれること。

※ 〈屈折した人〉= 現実におしつぶされて、欲しいものを、そのままの形で欲しいと言えない人のこと。
ニーチェの言葉では「弱者」。また、〈屈折〉は「ルサンチマン」

※ 〈素直な人〉= 欲しいものを、そのままの形で欲しいと言える人のこと。ニーチェの言葉では「強者」。

※ ニーチェは 認識よりもむしろ、われわれは〈素直〉になるべきだと説いた。



3. 近代芸術の帰趨

「芸術の非人間化」と 純粹化

- ・「人間中心主義」への疑問と、「要素還元主義」によって、
芸術は〈自律化・純粹化〉の道をたどる。
さらに「進歩主義」によって、その傾向に拍車がかかる。

「芸術の非人間化」と 純粹化

「作品はそれ自身のために聴かれねばならぬ [略]。

音楽が一つの気分を我々に引き起こすための単なる手段として、

付随的にまた装飾的に応用されるようになるや否や

音楽は純粹芸術として作用することをやめる」

→ ※ 音楽において情感は不純な要素なので、それを排して
より純粹な音楽をめざすべき。

エドゥアルト・ハンスリック 『音楽美論』 (1854=1960) p.154

「芸術の非人間化」の過程（音楽篇）

3
近代芸術の
帰趨

「芸術の非人間化」の過程（音楽篇）

3
近代芸術の
帰趨

下の3つの六角形に続く図形を選択してください。



(A)



(B)



(C)



(D)



(E)

「芸術の非人間化」の過程（音楽篇）

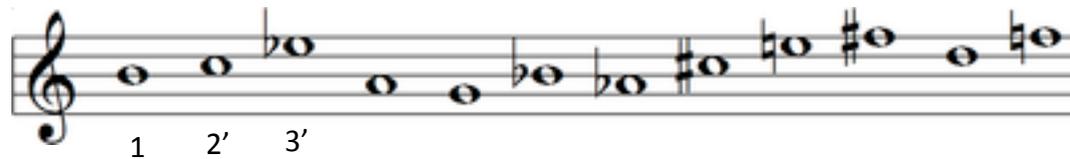
●「調性音楽」から「12音音楽」へ



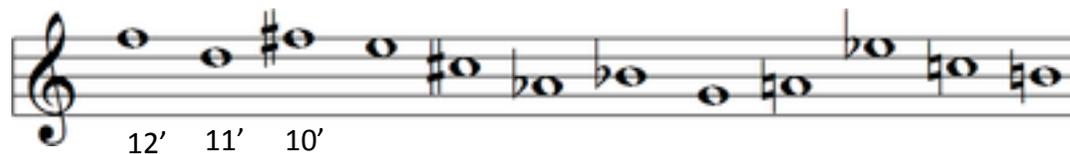
1オクターブ内の12個の音を重複なく並べて基本音列をつくる。嬉しい、悲しいなどが感じられないように並べる。



基本音列を逆行



基本音列の最初の音を軸にして、音程関係を反行



基本音列を逆行+反行

(楽譜: wikipedia「十二音技法」より)

「芸術の非人間化」の過程（音楽篇）

3
近代芸術の
帰趨

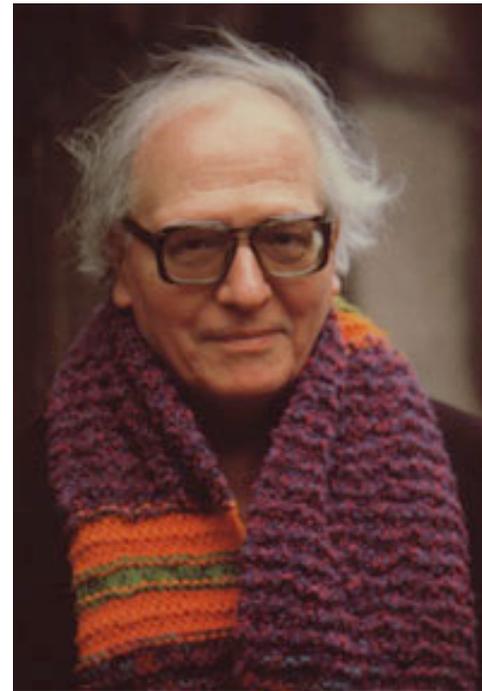
- 「調性音楽」から「12音音楽」へ



《ピアノ組曲》
Op.25 (1923)



アルノルト・シェーンベルク
(1838-1889, オーストリア)



《音価と強度のモード》
(1949)



オリビエ・メシアン
(1908-1992, フランス)

※ 12音音楽を「進歩」させた
「トータル・セリエズム」の
技法で書かれた曲

「芸術の非人間化」の過程（音楽篇）

3
近代芸術の
帰趨



ルキノ・ヴィスコンティ監督 映画『ベニスに死す』(1971)より

(5分程度)

アッセンバッハ(主人公) = ロマン派的 (“人間的”作曲家) モデル: 作曲家 マーラー
アルフレッド (青年) = 前衛芸術的 (“非人間的”作曲家) モデル: 作曲家 シェーンベルク

タツジオ (セーラー服の少年) = 〈究極の美〉の象徴

「芸術の非人間化」の過程（絵画篇）

3
近代芸術の
帰趨

「芸術の非人間化」の過程（絵画篇）

クレメント・グリーンバーグ (1909-1994, アメリカ) 美術批評家

【主張】

絵画に固有な要素 (メディウム・スペシフィシティ Medium Specificity) とは

- 「平面性」 (平面の板の存在)
- 「媒体」 (絵具の存在)

上記以外は絵画にとって不純なものなのではぶくべき。
このような純粹化によって「写真」との差異化を図ることができる。

→ 1950年代、ニューヨークの「抽象表現主義」へ

「芸術の非人間化」の過程（絵画篇）

3
近代芸術の
帰趨



ジャクソン・ポロック「インディアンレッドの地の壁画」1950年

<http://gqjapan.jp/2012/02/16/pollock100/>

「芸術の非人間化」の過程（絵画篇）

3
近代芸術の
帰趨

ジュール・オリツキー Jules Olitski (画家・抽象表現主義)

<http://homepages.rovers.net/~posters/1960-1970.html>

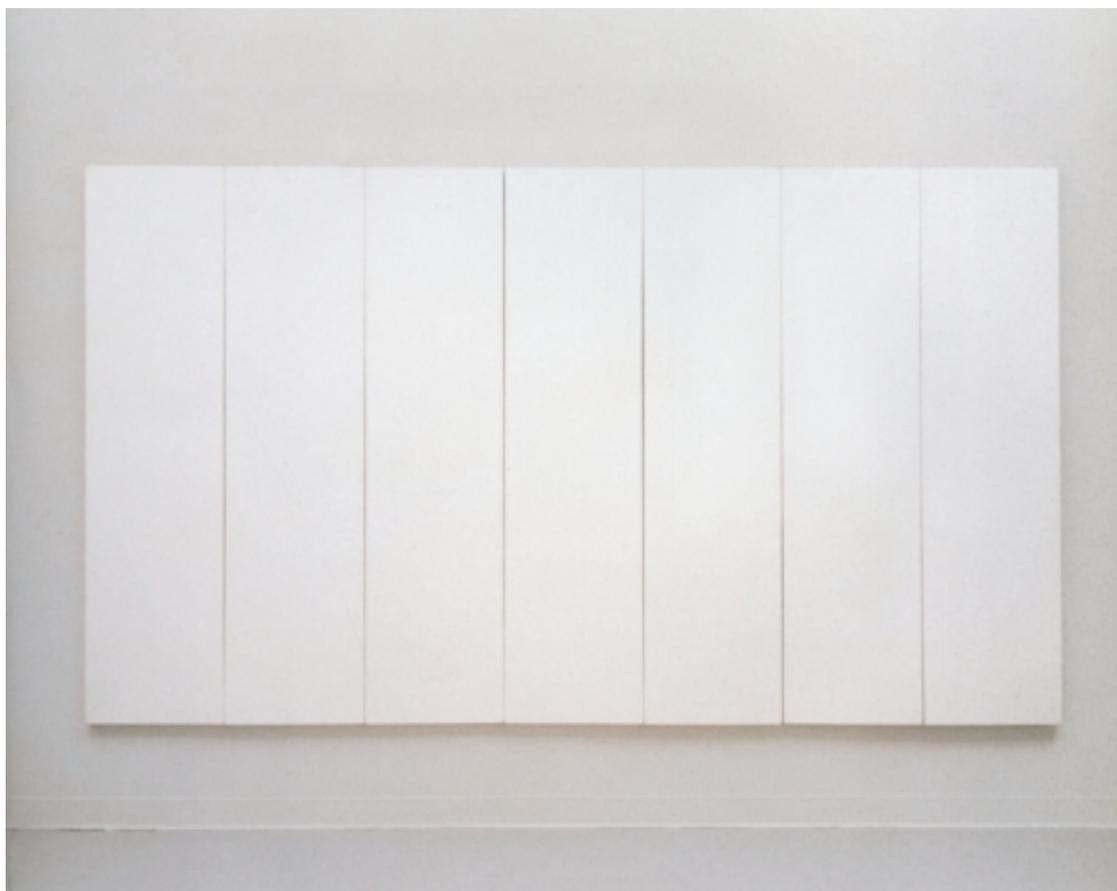
※ グリーンバーグが「現存する最高の画家」として彼の名をあげたという
[菅原：115]

モダンアートの帰結（絵画篇）

3
近代芸術の
帰趨

モダンアートの帰結（絵画篇）

3
近代芸術の
帰趨



ロバート・ラウシェンバーグ 《白い絵画》1951

Robert Rauschenberg "White Painting" [seven panel], 1951. Oil on canvas, 72 x 125 x 1 1/2 inches.

http://pastexhibitions.guggenheim.org/singular_forms/highlights_1a.html

モダンアートの帰結（絵画篇）

3
近代芸術の
帰趨

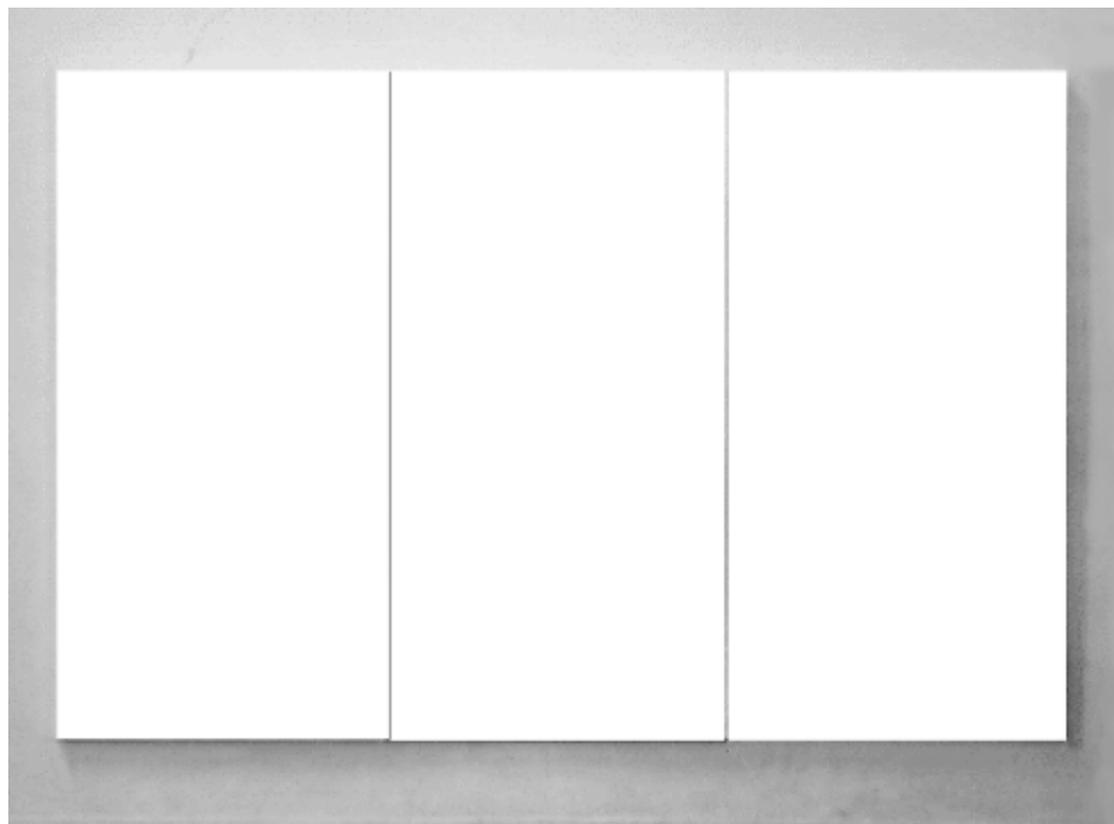


ロバート・ラウシェンバーグ
《白い絵画》1951

<http://canonpluscanon.wordpress.com/2010/03/09/robert-rauschenberg-white-paintings/>

モダンアートの帰結（絵画篇）

3
近代芸術の
帰趨



ロバート・ラウシェンバーグ
《白い絵画》1951

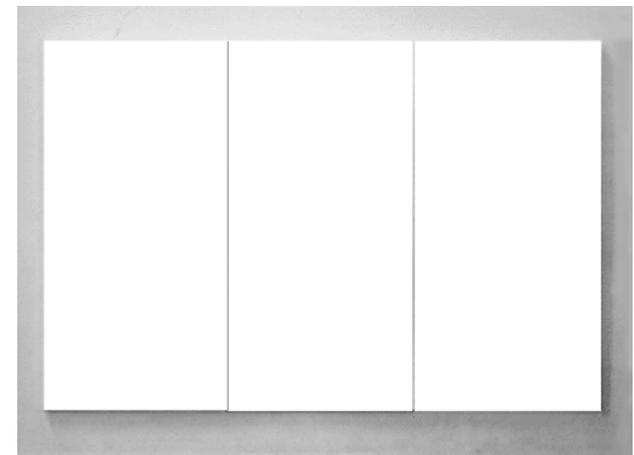
<http://monicadmurgia.com/tag/robert-rauschenberg/>

モダンアートの帰結（絵画篇）

「私に **4分33秒** の作曲させたのは、
無響室での体験と、
ロバート・ラウシェンバーグの
《white painting》だった」

ジョン・ケージ『自叙伝』(1989)より

http://johncage.org/autobiographical_statement.html



モダンアートの帰結（音楽篇）

3
近代芸術の
帰趨

モダンアートの帰結（音楽篇）

3
近代芸術の
帰趨

ジョン・ケージ《4分33秒》(1952)

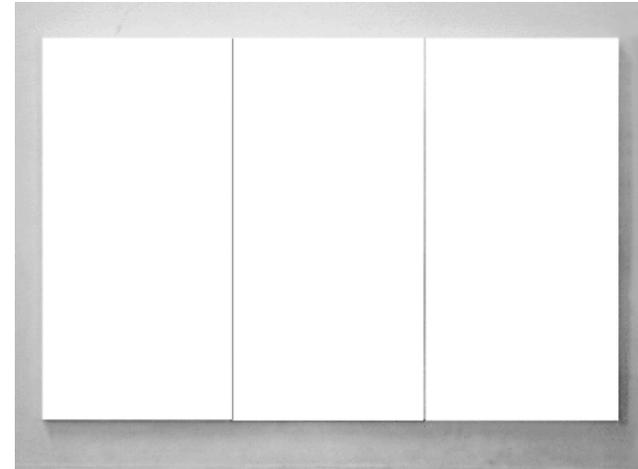
<http://www.youtube.com/watch?v=3fYvfEMUJl8>

(※ 純化の極北か)

- ・ 3楽章形式
- ・ 第1楽章を33秒、第2楽章を2分40秒、第3楽章を1分20秒
- ・ 楽章間に休みがある
- ・ 合計時間4分33秒で〈演奏〉する

モダンアートの帰結（音楽篇）

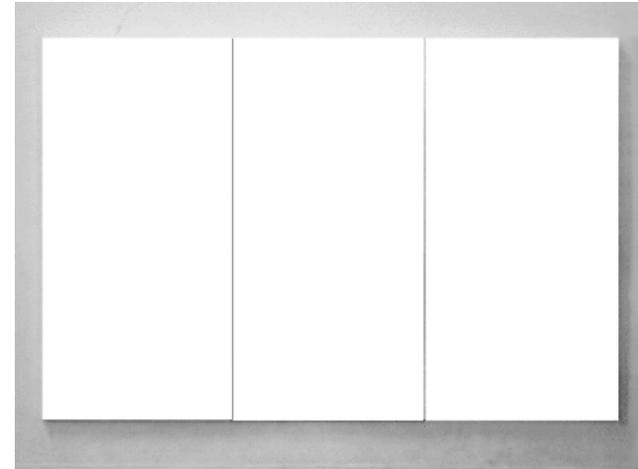
3
近代芸術の
帰趨



啓蒙主義に導かれた
「要素還元主義」、「進歩主義」を、究極に、突き詰めた結果、
音楽に音が無くなり、絵画には色と形が無くなった。

モダンアートの帰結（音楽篇）

3
近代芸術の
帰趨



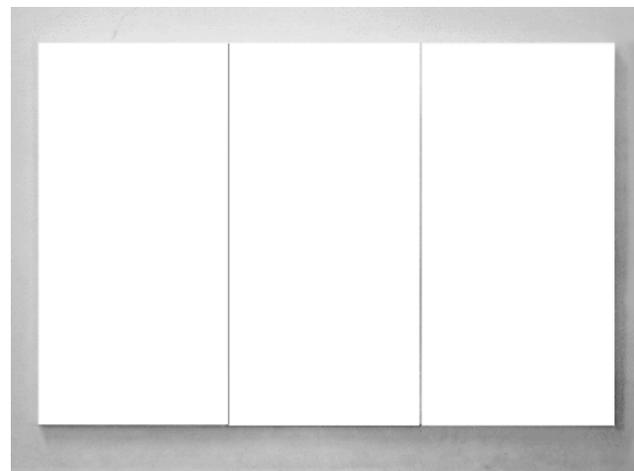
音楽に音が無く、絵画には色と形が無い。

したがって、これ以上の「進歩」は見込めなくなった。

しかしそれは「近代芸術」モダンアートの必然的な着地点であった。

モダンアートの帰結（音楽篇）

3
近代芸術の
帰趨

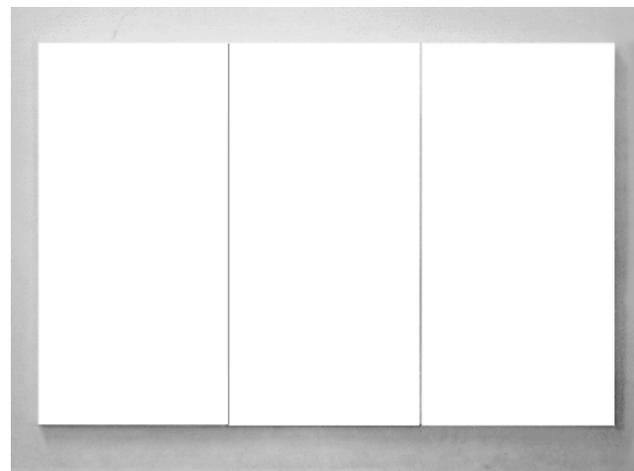


音楽に音が無く、絵画には色と形が無い。

※これは近代主義の先に「ニヒリズム」を予言した
ニーチェが示した通りではなかったか。

モダンアートの帰結（音楽篇）

3
近代芸術の
帰趨



ニヒリズムとは「最高の価値が無価値になるということである」

～フリードリヒ・ニーチェ『道徳の系譜』

※ モダンアートのその他の帰結

カールハインツ・シュトックハウゼン《習作II》(1954)

<http://www.youtube.com/watch?v=hXqvBvOXV3U>

- ・「電子音響音楽」へ
- ・音楽において人間的な要素を除去
- ・すべて機械によって演奏される
(世界初の無人の演奏会)

- ・倍音を含まない純音「正弦波」(sine wave) を使用

参考文献

- 渡辺裕『西洋音楽演奏史序説』春秋社
- 佐々木健一 (1995)『美学辞典』東京大学出版会
- 佐々木健一 (2004)『美学への招待』中公新書
- 小田部胤久(2008)『西洋美学史』東京大学出版会
- 西村清和 (1995)『現代アートの哲学』産業図書
- オルテガ・イ・ガゼット (1925=1968)『芸術の非人間化』荒地出版社
- L.ヴィスコンティ (1981)『ベニスに死す:ヴィスコンティ秀作集I』新書館
- E.ハンスリック (1854=1960)『音楽美論』渡辺護訳、岩波文庫
- F.ニーチェ (1887=1940)『道徳の系譜』木場深定訳、岩波文庫
- 菅原教夫 (1994)『現代アートとは何か』丸善ライブラリー
- 竹田青嗣 (1990)『自分を知るための哲学入門』ちくまライブラリー
- 竹田青嗣 (1992)『現代思想の冒険』ちくま学芸文庫
- 橋爪大三郎 (1988)『はじめての構造主義』講談社現代新書
- 内田樹 (2002)『寝ながら学べる構造主義』文藝春秋